

町民参加の町史づくり



竹富町史たより

2010・3・31

第31号



竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11番地-1
TEL (0980) 82-6191

目次

『竹富町史』第十巻資料編「近代5―波照間島近代資料集」を発刊……………	1
竹富町史編集委員会の動向……………	2
業務日誌……………	4
西表の自然	
『旅の画帖 日本の自然（二四七頁〜二七〇頁）』（金子 良 著）……………	7
竹富島の人物12	
金城亀千代（陽介）？一九四三年（昭和十八）……………	西里 喜行……………12
第二の故郷・下地島……………	下地 安……………13
平成21年度受贈図書一覧……………	14
竹富町史の刊行物……………	17
編集後記……………	21

●表紙の写真●

西表島日本政府農業資源調査が1960年（昭和35）3月から40日間余にわたり、西表島で行われた。資源調査は、西表島の開発等の方向性や可能性について多方面から探ろうという、大掛かりなものだった。米軍機を使ってヘリコプターによる空からの調査もあった。調査の途中の4月5日、ヘリコプターがエンジン故障によりクイラ川上流の鹿川台地に不時着するという事故が起き、関係者をひやひやさせた。結局、搭乗員7名はケガもなく大原に戻ってきた。

『竹富町史』第十巻資料編「近代5」波照間近代資料編」発行

波照間関係資料三題を収録

波照間島の明治・大正・昭和中期を知る近代文書や学校沿革誌を収録した『竹富町史』第十巻資料編「近代5」波照間島近代資料集」を、平成二十一年



度事業として発行しました。本巻は、平成十八年度に刊行した「近代4」官報にみる八重山」に次ぐ近代資料集で、第十巻資料編としては五冊目になります。

本巻に収録したのは、「自明治三五年一月至明治三十七年十二月 島庁通達綴

波照間村事務所」、「波照間島番所日誌(明治二十八年〜同二十九年)」、それに「波照間小学校沿革誌(第壹部)」の三種類の

資料類です。

『島庁通達綴』は、一九〇二年(明治三十五)から一九〇四年(明治三十七)の間に八重山島庁から波照間事務所へ出された令達、通達、内訓、公告、通知等です。それは行政文書の形式で発送されており、具体的には時の島司から島の村頭宛に送付されています。その件数は百四十七点に及びます。行政文書の内容を讀むと、時代を反映している文書が多々あります。

そのひとつに土地整理事業を終えた直後であることから、土地分割及び合併、土地整理に関する異動届、田祖の件等の文書があります。また、朝鮮・満州の支配権獲得をめぐつて日本とロシアが激突し、日露戦争が一九〇四年(明治三十七)に勃発しています。この戦争では日本海海戦が有名ですが、八重山島庁の行政文書のなかに「浦塩艦隊(ウラジオストツ

ク)発見」や「露(ロシア)艦発見」等の文書が注目されます。

『波照間島番所日誌』は、波照間村番所で毎日、記された備忘録で日にち、十千十二支、風向等が書き込まれています。一八九四年(明治二十七年)、九五年(同二十八)というと、まだ村番所が機能している時代です。記録を讀むと、六反帆船や伝馬舟等、さらに石垣島へ渡る際の船頭、乗組員の名前が出てきて興味深いものがあります。

『波照間小学校沿革誌(第壹号)』は、戦前に学校で起きた事象を、日誌の形式でまとめた記録簿です。このなかに、一人の兵士の「革命」により、西表島へ強制疎開させられた記録が厳然と残っています。

激動する現代社会において、我々は過去の歴史を捉え返し、そして今を直視するとき、近代資料は現在を見つめ、未来を見据える糧として、多くの示唆を与えてくれます。本巻は、『竹富町史』第七巻波照間島編の基礎資料として利活用されます。(通事孝作)

竹富町史編集委員会の動向

第二六回竹富町史編集委員会

第二六回竹富町史編集委員会が、平成二二年二月二七日午前十時より、竹富町役場二階会議室にて開かれた。出席者は編集委員十六人（欠席者一人）、事務局より二人。

まず竹富町史編集委員長・登野原武氏よりあいさつがあった。町当局の町史編集事業への配慮に感謝の辞を述べながら、これまで発刊した「資料編」により基礎資料が整ってきたことから、いよいよ本編ともいうべき「島じま編」刊行の時宜を得たことが確認された。

つづいて竹富町長・川満栄長氏、竹富教育長・慶田盛安三氏の言葉があった。川満町長は「歴史とは過去と現在との対話であり、そこから未来を示唆するものだ」とし、町史編集は竹富町の未来に大きな影響を及ぼす事業であること」を強調した。慶田盛教育長は平成二一年一〇月に教育長に就任した旨あいさつし、竹富町の歴史を後世に伝えるべく、町史編集事業への期待を述べた。

今回の大きな議題は二つ。一つは竹富町各島の「島じま編」取り組みへの進捗状況の報告と、もう一つは「自然編」の構想について。

①「島じま編」進捗状況について

「島じま編」の進捗状況について、平成二二年度に開催された各島の専門部会や学習会の内容も含めて、各島の専門部会長により報告された。

最初に竹富島編専門部長・石垣久雄氏より、「竹富島編」は平成二二年度に発刊予定であったが、章立てに再構成の必要があり、今年度の編集作業は版下制作までに留まることが報告された。その理由として、当初の構想から大きく変更したため、他島とのバランスがとれなくなつたこと、集まつた原稿の内容に重複する箇所がみられること、提出された手書き原稿のデータ化に事務局のほうで時間がかつたことなどが挙げられた。

小浜島編専門部長・新本光孝氏から「小浜島編」の構成と原稿提出状況が具体的な報告があった。島じまの原稿が九割以上集まつており、平成二二年度の発刊に向けて、万全を期して編集作業に取り組む旨述べられた。

大方どの島も構成が整い、各章・項目の執筆者割り振りが済んでいるが、執筆については進んでいないようである。また、町史編集構想のなかで、全体の整合性をはかることも確認された。しかし、一章をなす「人物」については、島の事情を汲みながら、採りあげる人物の基準を島ごとに設けることが認められた。

②「自然編」の構想について

第二五回編集委員会で「島じま編」で「自然」に触れるとき、

他島との共通するところが大きく、どのようにして書き分けるかという課題が浮上してきた。その課題を克服すべく、『竹富町史』「自然編」の発行が決まったが、具体的な内容については触れることができなかった。

今回の第二六回編集委員会で「自然編」を『竹富町史・別巻』として位置づけし、亜熱帯性気候、石西礁湖、西表・石垣国立公園を中心に、竹富町の大自然と多様性をアピールする、自然科学的な内容とし、「島しま編」を補完することに留意したものにすることが決定した。したがって「島しま編」では、人々からしとの関わりのなかで、人文科学的な自然へのアプローチから記録していくことになる。

「自然編」の土台づくりの役割を担う専門委員に新本光孝氏、花井正光氏、石垣金星氏、上江洲儀正氏が互選された。新本光孝氏には「熱帯・亜熱帯的地理」「島嶼的特徴」「石西礁湖」「西表・石垣国立公園」「動物」「植物」を柱とする、竹富町の自然の特色を前面に押し出した基本構想を提案していただいた。今後は専門部会が、構想案に基づきながら、検討を加えていく見通しである。

業務日誌

二〇〇九年（平成二一）

四月二日

- 金子良氏のご遺族より、写真を中心とした資料の寄贈あり。一九六〇年三月の農林省による調査時のカラー写真が中心で、ほとんどが西表島におけるもの。

四月七日

- 金子資料の入力（『竹富町史だより』本号）。

四月一二日

- 飯田泰彦・町史編集係が新任研修に出席（↓十七日）。

四月二〇日

- 登野原武委員長を交え、事務局で竹富町史編集年間計画を立てる。

四月二一日

- 黒島精耕氏より小浜島原稿「総説」古謡「歌謡」「言語」を受理。

四月二四日

- 新城島編小委員会（登野原武氏、安里碩八氏、安里功氏）が、西表島大原地区（於・竹富町離島総合センター）にて七人のインフォーマントより聞き取り調査。

五月一日

- 通事孝作・町史編集係長が職場に復帰。業務の経過を報告し、年間計画を立てる。

五月六日

- 波照間島編小委員会を開催（於・波照間公民館）。午後から有志による波照間島巡見。

五月一三日

- 町史編集室にて、アウエハント静子氏、上江洲儀正氏、笹本真純氏、玉城功一氏、通事孝作氏、飯田泰彦氏が出席し、波照間島の暮らしについての座談会。

夕方より波照間島出身の有志による波照間島についての学習会を開催（於・喫茶店「海坊主」）。

五月二二日

- 「竹富島編」筆料支払い。

六月八日

- 里井洋一委員より、石垣市立八重山博物館の古文書資料調査。

六月一一日

- 「黒島編執筆依頼」。

六月一三日

- 里井洋一委員による古文書資料の撮影（於・八重山博物館）。

六月一五日

- 慶田城久氏より小浜島編原稿「年中行事」「人生儀礼」受理。

六月二五日

- 西岡敏氏より竹富編原稿「言語」の改定稿受理。

六月二六日

- 竹富島編専門部会開催（於・町史編集室）。専門委員の石垣久雄氏、西里喜行氏、阿佐伊孫良氏、狩俣恵一氏が出席。

六月二九日

- 下地安氏より原稿「第二の故郷下地島」を郵送にて受理（『竹富町史だより』本号）。

七月三日

- 小浜島編専門部会開催（於・小浜島）。専門委員の新本光孝氏、黒島精耕氏、

慶田城久氏、花城正美氏が出席。

七月六日

●竹富編原稿の石垣久雄著「カタツムリの食べ方」を入力。

七月七日

●竹富編原稿の前本隆一著「人とくらし食」を入力(↓一三日)。

七月二十四日

●沖縄県地域史協議会の研修会に飯田泰彦出席(於・沖縄県立公文書館)。

七月三〇日

●黒島編専門部会開催(於・町史編集室)。
●専門委員の玻座真武氏、當山善堂氏、本成尚氏、鳩間真英氏が出席。

八月六日

●町史編集室の書棚が倒れ、室内に書籍が散乱する。

八月十日

●登野原武氏より新城島編原稿「戦時の南風見移住」を受理。

八月一四日

●新城島編専門部会開催(於・町史編集室)。
●専門委員の登野原武氏、安里碩八氏、安里功氏、安里精善氏が出席。

八月二十六日

●上勢頭芳徳氏より竹富島編原稿の改稿「人とくらし住」を受理。

九月三日

●「波照間島編執筆連絡協議会」を開催(於・波照間農村集落センター)。午後より有志による波照間島巡見。

九月九日

●石垣久雄氏より竹富島編原稿の改稿「教育」を受理。

九月二十五日

●鳩間島編専門部会開催(於・琉球大学)。
●専門委員の吉川安一氏、大城肇氏、加治工真市氏、島袋憲一氏、飯田泰彦町史編集係とオプザーバーとして大工義紀氏が出席。

九月三〇日

●小浜島編の原稿締め切りを延期し一二月二〇日とする。

一〇月二〇日

●狩俣恵一氏より改稿した竹富島編の原稿をメールにて受理。

一〇月二八日

●石垣久雄・阿佐伊孫良両氏による竹富

島編原稿の読み合わせ(於・町史編集室)。

一〇月二十九日

●琉球放送(RBC)の番組「民謡で今日拝なびら」の生放送で飯田泰彦町史編集係が電話インタビューを受け、竹富町の話題として、竹富町史編集事業が紹介される。

十一月二日

●登野原武氏より新城島編原稿「バナリ(新城)の語源について」「明和の大津波の大惨事」「上地島の『武士の館』」三編を受理。

十一月二五日

●石垣久雄・阿佐伊孫良両氏による竹富島編原稿の読み合わせ(於・町史編集室)。

十一月二七日

●花城吉治氏より小浜島編原稿「交通・運輸」を受理。

十二月三日

●黒島編学習会を開催(本庁二階委員会)。

十二月四日

●新城島編学習会を開催（於・町史編集室）。登野原武氏、安里碩八氏、安里功氏が出席。

二月八日

●事務局では石垣久雄・阿佐伊孫良両氏をまじえて竹富編発刊の見通しを立てる。章立てに再構成の必要があり二一年度は版下の作成までを予定とする。

二月一日

●西表島編専門部会を開催（於・町史編集室）。専門委員の石垣金星氏、里井洋一氏、大底朝要氏、三木健氏、古見代志人氏が出席。

二月一七日

●安里精善氏より新城島編原稿「年中行事」を郵送にて受理。

二月二二日

●登野原武委員長、飯田泰彦町史編集係が「県立図書館意見交換会」に出席（於・八重山支庁）。

二〇一〇年（平成二二）

一月二八日

●阿佐伊孫良氏より竹富島原稿「人物」

補足分を受理。

二月四日

●登野原武委員長より竹富島編原稿「あいさつ」を受理。

二月八日

●仲盛長秀氏より小浜島原稿「まじない」を受理。

二月十日

●八島印刷が『竹富町史』第十巻「近代5」波照間島近代資料集」の増刷を納品。

二月一七日

●大仲康文氏より小浜島編原稿「学校教育」を受理。大盛聡氏より小浜島原稿「芝居」を受理。

二月一八日

●竹富町長室において、『竹富町史』第十巻「近代5」波照間島近代資料集」の発刊記者会見開催（↓「八重山毎日新聞」平成二二年二月一九日、『八重山日報』年二月一九日、『琉球新報』二月二二日、『沖縄タイムス』二月二〇日）。

二月二七日

●第二六回竹富町史編集委員会開催（本庁二階委員会室）。編集委員一六人出席。

三月三日

●小浜島専門部会開催（於・小浜島）。専門委員の新光孝氏、黒島精耕氏、慶田城久氏、花城正美氏が出席。

三月一七日

●竹富島編専門部会開催（於・町史編集室）。専門委員の石垣久雄氏、西里喜行氏、阿佐伊孫良氏、狩俣恵一氏が出席。

三月二五日

●仲盛敦氏より小浜島原稿「先史時代の小浜」歴史時代草創期の小浜」群雄割拠時代とオヤケアカハチ事件」文化財」を受理。

「西表島の自然」

「旅の画帖 日本」の自然

(金子 良 著)

西表島を調査したのは一〇年前になるが、南海の秘島という印象はいまも生き生きしている。当時の写真を参考にその印象を絵に



してみた。

西表島はいりおもてしまと読む。太陽がはいる方向だからで、東はあがりと呼ぶ。沖縄列島の西南端に位置するこの島は、本島について

で大きく二九〇平方キロもあるが、人口は三〇〇〇人あまりで、島の大部分は密林におおわれている。深い谷には豊かな水が流れて多数の滝がかけ、谷の下流は沈水して入江の奥の峽谷に海水が浸入する。日本に残されたこの秘境は開発に特別な注意が必要であり、全島を公園のようにして保護することが望まれる。

~~~~~  
 崎山廃村の遠望 (一九六〇年三月) 188頁

西表島の開発がおくれたのはマラリヤのためで琉球王朝の時代に付近の島からしばしば強制移住させたが、多くの部落がマラリヤで全滅し廃村となった。島の西端に近い崎山もその一つである。崎山節は家族と別れて波照間島から移住させられた人達の間にも生まれたものといわれる。その意味は「天から降ってくる雨粒ならば笠をかぶり、みのをつけて防ぐことがで

きるが、国王の命令は絶対だと役人にいわれ、泣く泣く別れて崎山にきた。山へ登って故郷を眺めたら、わが父母や恋人の顔のようにも見え、涙でかすんでしまったので泣きながら戻ってきた」という悲しいものである。



その山から廃村の跡を眼下に眺めると、海は青・藍・緑・灰色の美しい縞模様をなし、遠方の岬は傾斜した砂岩の層が急崖をなして海へ切れこんでいる。

~~~~~  
 密林のなかの滝 (一九六〇年三月) 189頁

西表の山はほとんど常緑広葉樹の密林でおおわれている、すこし傾斜がゆるいところは湿地があり、ときには滝がかかる。こんなところへ踏みこむと樹の幹はみのを着たようなつるあだんからまれ、



葉の垂れ下がった大谷渡りが付着しており、しだの化物のようなへごやし、里芋に似たくわずいもの大きな葉がかぶさって昼もうす暗

い。踏跡をはずすと方向を失い、かつて密林で迷って死んだ人が招くとおそれられている。

ここには世界に珍しい山猫もいるそうで、山猫に見られたら山を降りろといわれている。猪は人の数より多く、群をなして移動することがあり、部落の耕地は猪垣で防ぐが、離れた耕地は猪に荒らされて維持が困難である。はぶは猪に食われるからなどといわれて山には少ないが、山いげという猛毒の毛虫や山びるが密林にひそんでいる。

~~~~~  
**猪を獲って浦内川を下る舟**  
(一九六〇年三月) 190頁

浦内川は島最大の川で大河のような洋々たる流れをなし峡谷の奥深くまで舟で行ける。青い水にかぶさるような密林の緑が映え、鮮やかな薄紫の花(土地ではみきの花という)が点々とまじり、赤・白・黄のつつじも河岸に趣きそ



える。上流には大きな滝、瀑流がかり、砂岩の一枚岩にはポットホールが無数に掘られている。岩かげは大うなぎの寝床で直径二〇センチ長さ一・五メートルぐらいのが獲れるという。

水静かな峡谷のなかをくり舟で下ってきた人達は、山で獲った数頭の猪をのせていた。

~~~~~  
入江の奥にかかる滝
(一九六〇年三月) 191頁

沈水した本流へは支流が溪谷を

なし、入江の奥や、峡谷には滝が落ちてゐる。砂岩の岸壁にかかる滝の直下にはマングロブが茂り、



人跡まれな入江の奥に舟を入れてマングロブの葉かげから滝の音を聞くことができる。

~~~~~  
**マングロブの間を小舟で行く**  
(一九六〇年三月) 192頁

広い谷底をもつ川は、その大部分をマングロブがびっしり埋めており、そのなかを流路が蛇行し迷路のように分岐する。静かな水

面に小舟を滑らせていくと、行きづまるかと思えば水面が開け、濃緑の葉が水に映って美しい。

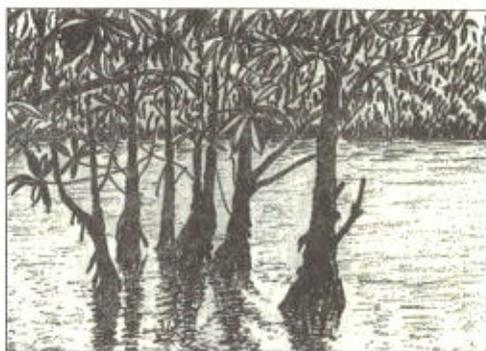


こんな川の奥にただひとり山を

開墾してパインを栽培し生活している人がいた。聞けば戦時中九州の炭坑から西表の石炭を掘りに移って来て、戦時中の言語に絶するマラリヤ地獄を生きぬいたが、郷里へも帰れず結婚もできず淋しく生活しているとのこと。パイン畑はいつも猪に荒らされて困つているといふ。(この川の水源地付近でわれわれは数日後に遭難した)

マングローブのなか（一九六〇年三月）193頁

マングローブは淡水と海水のまじるところに密生するひろぎ類の群落である。干潮時にはこれらの根がこの足のようになられる。ひろぎの梢には万年筆大の実が下



っており、先端が尖っているのだから、落ちればその実が泥土に刺さって発芽する。

潮の干いたマングローブの切れ目には、無数のとびはげが動きま

わり、近よれば一斉に飛び立って壯観である。また泥の穴からたくさんのおがが出入りして、潮を吹きながらからだに不似合いなちんばの大きなさみを上げたり下げたりしている。土地の人はやくじやまと呼び三味線をひいて遊んでみるとみだた。

一枚岩の河口と鳩間島の遠望（一九六〇年三月）194頁

西表島の川は砂利河原がなく一枚岩の河床が多い。流域の岩があまり堅くない砂岩なので礫は砕け



て流れてしまうせいであろう。

北部海岸のこの小流は瀑流、滑（ナメ）、滑（トロ）が河口まで続いて、海中に突き出た岩かげにはマングローブが見られる。沖合はるかに鳩間島が横たわり、珊瑚礁の海は多彩な模様をえがいている。鳩間島の人は一〇キロの海上を西表島まで舟で通い耕作をしている。

入江の水際に立つ民家（一九六〇年三月）195頁

われわれが西表島上陸第一歩を印した舟浦は、わずかの家がばらばらと立つ程度の船つき場であった。しかし調査団歓迎の門がつけられ、当時としては困難な日の丸がひるがえっていた。三月初めというのに、夏のように強い光のなかで、波静かな入江の水際にぼつくり立つた家と台風のためか葉を落とした樹の姿が、印象的であった。



祖納部落の石垣とふくぎ（一九六〇年三月）196頁

祖納（ソナイ）は四〇五〇〇年の歴史をもつ西表島最大の部落で、岬の上と台地下の砂浜に渋い赤瓦ぶきの家が並んでいる。苔むした石垣と黒々としたふくぎの防風がきのわきを珊瑚礁のかけらを敷いた白い道が青い海のほうへ下つてゆく。外離れ、内離れの島に囲まれた入江の中央には丸い小島が浮かんでいる。森閑とした部落のどこからか三味の音が漏れてくるこ

ともある。



祖納部落のお嶽と、くばの木  
(一九六〇年三月) 197頁

部落のお嶽(ウタキ)(拝み所)ウガンジュはうす暗い樹蔭のなかであって巫女がお祈りする場所である。石垣に囲まれた境内はかつて男子禁制のところとなっていた。ここには枇榔樹(ヒロウ)(くばの木)の大きな木が残されており、高く空にぬき出た樹は神の昇降する神木とされている。



あだんの茂る台地から海を望む  
(一九六〇年三月) 198頁

海岸の珊瑚礁石灰台地や砂丘にはあだんが密生している。あだんの実は不細工な腕をのびたよう、太い幹に堅く長い葉が集まりついている。ときに緑の葉の間からパインアップルのような大きい黄色の実をのぞかせていることがあるが、この実は食べられない。台地に立ってあだんの葉ごしに眺める海は青く輝いて美しい。台地の表面は石灰岩の露岩やドリネ

が分布し、地下にはしばしば洞窟が形成されている。ここには水が

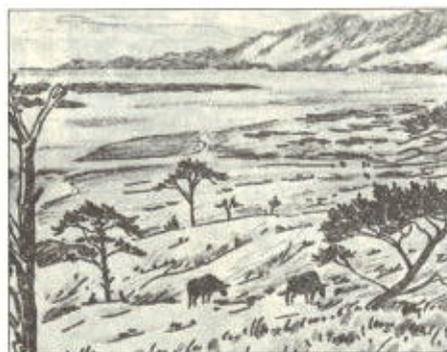


湧いて部落の大切な水場になるところもあるが、草木にかくれた洞窟のなかには風葬の場に使われて人骨の散乱する廃村の跡もあるという。

草原から砂州の島由布を望む  
(一九六〇年三月) 199頁

マラリヤのひどかったころの名残り、付近の小島からの通い耕作はいまでも続いている。由布もそのひとつで三〇〇メートルほど離

れた砂州の上に、十数戸の家が集まってできた部落である。マラリヤの心配がなくなった現在でも、山越えの強風をよけるには山から遠い砂州の上が住みよいという。



この付近の台地は一面の草原をなし、琉球松がまばらに生えている。下に黒牛が繁牧されていた。島の東部と南部の海岸は悪性のアノフェレスが多く、かつて何回も移住したが古見を除く全部落が死に絶えた。これに対し西北部の水田地帯は、東部ほど水が清くないがアノフェレスの毒性が弱く、

いくつかの部落が残ったといわれる。いま、東部の草原には鉄砲百合の群落が、死に絶えた人のかわりに繁っている。

道のほとりの榕樹（一九六〇年三月） 200頁

気根の垂れ下った榕樹は一本で森のように広がっている。道のほとりにあつてさえ、いかにも奇怪な姿をしているのに、深い密林のなかに茂る気味悪い榕樹の下に迷いこんだら、生きて帰れないような気がするであらう。



密林に不時着したヘリコプター（一九六〇年四月） 201頁

西表島調査のおわりに、われわれの乗ったヘリコプターが四〇〇メートルの上空で黒煙を吹きだした。密林中の水源に近い湿地に不時着したが、機は前と腹を焼いただけで爆発せず自然消火し、われわれは密林のなかで火を燃やしなから一夜を過ごし救援を待った。終夜聞えた蛙の鳴き声、夜鳥、ぶっぼうそうに似た声などが夜明けとともに小鳥のさえずりに変わってから数時間足らずで捜索にきた飛行機と連絡がつき、小型ヘリコプターで一人づつ無事に帰ることができた。

部落に残ったわれわれの仲間や、島の人達の心配は大したもので、西表の将来に不吉なものを感じたそうだが、無事な姿に大喜びで、翌日はお祝いと別れを兼ねた踊りと歌の会が盛大に開かれた。さす

がは民謡の宝庫だけあつて自然と生活の調和に感心したが、そのなかでも古い部落の古見に伝わる典



雅な古見の浦の踊りなどには強い印象を受けた。

黒島の珊瑚礁（一九六〇年四月） 202頁

黒島は西表島の東南一五キロメートルほどに位置し、われわれは帰途この島へ立寄った。全島隆起珊瑚礁からなり、マラリヤのないため早くから拓けた。しかし水に乏しく飲用水は天水を利用して

る。船は沖で停泊し小舟で上陸したところは潮の干いた珊瑚礁のブラットホーム（波蝕台）で、一時代前の珊瑚礁の海蝕面がきのこ状に残っている。このきのこに手を触れると切れるように鋭い凸凹がある。

珊瑚礁の海には色鮮やかな魚が泳いでおり、ブラットホームの水たまりからは、かに・たこ・えび・うなぎなどが獲れる。貝類も多種多様でどれを拾ってよいか迷ってしまう。



## 金城亀千代(陽介)? 一九四三年(昭和一八)

西里 喜行

八重山文学史上において重要な位置を占める文芸同人誌「セブン」の関係者で、大正末から昭和初期にかけて、即ち一九二〇年代に、八重山近代文化推進の初期の役割を担った文化人の一人として知られている。

亀千代は一九二二(大正一一)年に竹盛勇らと共に沖縄師範学校に入学し、在学中修学旅行で九州各地を見学、八幡製鉄所の労働争議を知って労働・社会問題に関心を持つようになったと言われる。また、同世代の細原徹の記憶によれば、夏休中には郷里の竹富島へ帰り、竹盛勇らと共に小学生を集めて音楽会を開催したり啓蒙活動をしたようである。ちなみに、鹿地亘編『反戦資料』(同成社)に収録された中国側の反戦放送用原稿では、「八重山郡、竹富町字竹富出身で、現在師範学校在学中の竹盛治、金城亀千代、医学専門学校の大底定美、水産学校の学生の大浜武治などの十二人は、暑中休暇中帰村するや、村の小学校で音楽会をひらき、民衆をあつめてつぎのような演説をやった」として、亀千代らの政府や軍部に対する痛烈な批判を込めた反戦演説が記録されているものの、亀千代らの帰省時期を「昭和十六年八月」とするなど、若干の誤りがあり、正確な記

述ではない。とは言え、一九二〇年代の「蘇鉄地獄」の時期に、師範学校在学中であった亀千代らは時代の雰囲気敏感で、労働・社会問題にも目を向け始めていたことを示す一例と見ることがができる。

師範学校卒業後、亀千代は八重山へ帰って文学活動、同人誌の「セブン」に「世紀末的島の心臓」(第一年第一号、一九二七年)「犯罪地帯」(第三年第三号、一九二八年)などの注目すべき作品を発表した。「世紀末的島の心臓」には「スル、虫に食ひ付かれた／芋畑は焼け爛れた火事場だ／百合の根／蘇鉄の実が食へなくなったら／今度は誰に食ひ付くのか」といった過酷な現実が詠い込まれている。

まもなく九州へわたった亀千代は、鹿児島で発行されていた新屋敷幸繁編集の『南方楽園』(昭和二年六月号)に「市街」(詩)や「前月詩評」を発表しながら、他方で福岡あたりで新劇の演劇グループに入り、演劇活動に熱中した外、桜木康雄というペンネームで月刊雑誌や児童文学雑誌『土と兵隊』などに作品を投稿したと言われる。

一九三六(昭和一一)年、再度上京した亀千代は演劇集団「街の小劇場」同人として活動した外、エスベラント運動にも熱中したようであるが、活動の詳細は不明である。一九四三(昭和一八)年二月二十日、東京で病没した。

(亀千代のご令室金城節さん及び細原徹さんからの聞き取り、砂川哲雄著『八重山文化論序説 八重山から。八重山へ。』三六九、三八九頁参照)

## 第二の故郷 下地島

下地 安

私が、大原小中学校下地分校に赴任したのは、1951年（昭和26年）で58年前も前の事です。高校卒業したばかりの19歳の9月でした。

教師という職業に憧れ、胸をわくわくさせながら柳行李一つ持ってサバニに乗り、下地島へ到着しました。

当時の教師は、故久高一男先生、安里功先生の3人でした。小学生17人、中学生9人が在籍していましたが、低学年は私が、中学校の音楽も受け持っていました。高学年は、安里先生、中学校は久高先生が担任しておられました。

校舎は小中別々にあり、運動場は小中合同で使用しました。

学校には時計もなく大体の時刻で鐘を鳴らし合図していました。楽器は、安里先生所有のハーモニカのみでした。

職員会議は、本校のある大原へサバニで渡り、そこで行なわれました。当時の校長先生は、故仲本正貴先生でとんちが上手で温厚な方でした。先生の周りはいつも笑いがありました。

運動会の練習になると、児童の前でダンスを踊らなければなりません。てれている私に久高先生は、「あなたはこれから何十年も教師をするのだ」と、叱られた事を今でも覚えています。

運動会の賞品は、手作りのわらじ、ぞうり、きね、もっこ、あんつく、ざる、かご等でした。

子供達は、とても明るく素直で弟や妹のようでした。楽しい思い出をたくさん残してくれました。ススキの枯れた幹を束ねてそれを松明にし、漁火をしたり、もっこん（やしがに）を取ってきてその夜のうちに食べたりしました。又引き潮の時は、潮干狩を楽しみました。向かいにある上地島へも潮が引くと歩いて渡れるので、そこへも何度も訪れました。帰りの楽しみは、貝や魚を取る事でした。貝類も豊富でした。

夜はトランプをしたり、歌を歌ったり、楽しい毎日でした。初めてトランプを見る子もいました。

又給料は安くそれだけでは生活できませんでしたので、野菜、バナナ、海産物など島の人々に援助してもらいました。人情豊かな心は今でも忘れていません。

感謝、感謝の一言です。

楽しかった一年七か月も夢のように過ぎ去り、待っていたのは廃校という悲しい出来事でした。今では当時の面影はなく、上空から見る島は、牧場になり、サイロと管理人の住宅があるのみです。時代の流れを感じ、淋しい思いです。機会があればもう一度訪ねてみたいです。

ああー。なつかしい第二の故郷下地島よ。

※一部・真栄里晃氏の証言

## 平成21年度受贈図書一覧

多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。  
あわせてお礼申し上げます。

| 受贈図書（発行年・著者）                                                                           | 寄贈者芳名                   |
|----------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------|
| アーカイブス—沖縄県公文書だより—第37号（2009年・沖縄県公文書館指定管理者沖縄県文化振興会資料課）                                   | 沖縄県公文書館指定管理者沖縄県文化振興会資料課 |
| あしびなあ 第20号—伊江島研修特集号—（2009年・沖縄県地域史協議会）                                                  | 沖縄県地域史協議会               |
| 奄美沖縄民間文芸学 第8号（2008年・奄美沖縄民間文芸学会）                                                        | 石垣 繁                    |
| 石垣博孝絵画展—五十五年の軌跡—（2009年・「石垣博孝絵画展」実行委員会・八重山毎日新聞）                                         | 「石垣博孝絵画展」実行委員会          |
| 伊平屋島柚山竿入帳—平成17から20年度日本学芸術振興会・科学技術研究補助金・基盤研究A「沖縄近代法の形成と展開—沖縄の特殊性と普遍性—」（2009年・田里修・田里雅湖編） | 森 謙二                    |
| 移民研究 第5号（2009年・琉球大学移民研究センター）                                                           | 琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門       |
| 西表島における歴史・文化遺産の最発見に係る資源調査業務—宇多良炭坑跡を中心に—（2009年・竹富町）                                     | 竹富町役場商工観光課              |
| イリオモテのターザン（2009年・水田耕平）                                                                 | 飯田泰彦                    |
| 「歌とエイサー」[「沖縄市立郷土博物館第36回企画展 沖縄市のエイサー」より抜粋]（2008年・飯田くるみ）                                 | 飯田くるみ                   |
| 沖縄西表（祖納）方言の格ととりたての意味用法 [法政大学沖縄文化研究所「琉球の方言33号」抜刷]（2009年・金田章宏）                           | 八重山文化研究会                |
| 沖縄県公文書館だより アーカイブス 第36号（2009年・沖縄県公文書館指定管理者沖縄県文化振興課資料課）                                  | 沖縄県公文書館指定管理者沖縄県文化振興課資料課 |
| 沖縄県史だより 第18号（2009年・沖縄県文化振興会史料編集室）                                                      | 沖縄県公文書館指定管理者沖縄県文化振興課資料課 |
| 沖縄県地域史協議会会誌 第32号（2009年・沖縄県地域史協議会）                                                      | 沖縄県地域史協議会               |
| 沖縄の印部石（2009年・法政大学沖縄文化研究所）                                                              | 沖縄県地域史協議会               |
| 沖縄文化研究 35（2009年・法政大学沖縄文化研究所）                                                           | 法政大学沖縄文化研究所             |
| 沖縄県平和祈念資料館だより 第17号（2009年・沖縄県平和記念資料館）                                                   | 沖縄県平和記念資料館              |
| 沖縄県平和記念資料館年報 第9号（2009年・沖縄県平和祈念資料館）                                                     | 沖縄県平和記念資料館              |
| かがやけ肉用牛—社団法人沖縄県肉用牛生産供給公社27年の軌跡—（2005年・社団法人沖縄県肉用牛生産供給公社）                                | 飯田泰彦                    |

|                                                                                          |                         |
|------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------|
| 鹿川ウブドー遺跡 埋蔵文化財発掘調査概要報告 (2009年・竹富町教育委員会)                                                  | 竹富町教育委員会                |
| 嘉良嶽東貝塚・嘉良嶽東方古墳群—新石垣空港予定地内遺跡発掘調査報告書— (2009年・沖縄県立埋蔵文化財センター)                                | 沖縄県立埋蔵文化財センター           |
| 観光産業資源としての伝統産業(染織物)および情報化への調査〔沖縄国際大学産業総合研究所『地域産業研究No.9 観光の国際化に関する地域間比較研究』抜刷〕(2009年・又吉光邦) | 又吉光邦                    |
| 感想文集 ひめゆり 第20号 (2009年・ひめゆり平和祈念資料館)                                                       | ひめゆり平和祈念資料館             |
| 宜野湾戦後のはじまり—『宜野湾市史』第8巻資料編7戦後資料編1戦後初期の宜野湾(解説編)— (2009年・宜野湾市教育委員会文化課)                       | 宜野湾市教育委員会文化課            |
| 近代沖縄における旧慣調査とその背景〔『地域研究』第5号抜刷〕(2009年・平良勝保)                                               | 平良勝保                    |
| 国指定史跡保存計画書 下田原城跡 (2006年・竹富教育委員会)                                                         | 竹富町教育委員会                |
| 久米村マップ—歴史の散歩 古きをたずねて— (2008年・久米崇聖会)                                                      | 沖縄県公文書館指定管理者沖縄県文化振興課資料課 |
| 久米島調査報告書(1) —地域—研究シリーズNo.36 (2009年・沖縄国際大学南島文化研究所)                                        | 沖縄国際大学南島文化研究所           |
| 黒島調査 —第31回野外学習会(調査要項)— (1977年・琉球大学地理研究会)                                                 | 阿佐伊孫良                   |
| 古稀記念 七三年の足跡 (1984年・宮良勇吉)                                                                 | 坂座真 武                   |
| 蔡温年譜—平成17から20年度日本学術振興会・科学技術研究補助金・基盤研究A「沖縄近代法の形成と展開—沖縄の特殊性と普遍性—」— (2009年・田里修・田里雅湖編)       | 森 謙二                    |
| 薩摩支配400年琉球処分130年を問う (2009年・薩摩の琉球支配から400年・日本国の琉球処分130年を問う会)                               | 砂川哲雄                    |
| さふじま —黒島の民話・謡・謠集— (1987年・幸地厚吉)                                                           | 坂座真 武                   |
| 首里城研究 No.11 (2009年・首里城研究会)                                                               | 首里城公園友の会事務局             |
| 少年と石垣島特攻基地 (2005年・國吉實)                                                                   | 飯田泰彦                    |
| 徐葆光の足跡—琉球王朝の黄金時代をしのぶ— (2009年・徐葆光記念事業期成会)                                                 | 徐葆光記念事業期成会              |
| 生命の東石—生命科学振興会北海道支部15周年記念誌— (2009年・佐々木地郎)                                                 | 石垣 繁                    |
| 旅の画帖 (1971年・金子良)                                                                         |                         |
| 多摩のあゆみ 第134号 (2009年・たましん歴史・美術館歴史資料室編)                                                    | 増田昭子                    |
| 時は命、心は水のように—「人生の冬」に思う— (2009年・安里武泰)                                                      | 安里 功                    |
| 仲間後原遺跡 仲間あさと原の印部土手—浦添大公園整備発掘調査事業に伴う発掘調査報告— 浦添市文化財調査研究報告書 (2007年・浦添市教育委員会)                | 浦添市教育委員会                |
| 仲間後原近世墓群 浦添貝塚—浦添大公園整備発掘調査事業に伴う発掘調査報告— (2009年・浦添市教育委員会)                                   | 浦添市教育委員会                |
| 南島文化研究所所報 第55号 (2009年・沖縄国際大学南島文化研究所)                                                     | 沖縄国際大学南島文化研究所           |

|                                                                                            |                  |
|--------------------------------------------------------------------------------------------|------------------|
| 南島文化 第31号 (2009年・沖縄国際大学南島文化研究所)                                                            | 沖縄国際大学南島文化研究所    |
| 日本の自然 (1983年・金子良)                                                                          |                  |
| ひめゆり学園 (女師・一高女) の歩み—ひめゆり平和祈念資料館開館20周年記念特別企画展— (2009年・沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会立ひめゆり平和祈念資料館)         | ひめゆり平和祈念資料館      |
| ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第42号 (2008年・ひめゆり平和祈念資料館)                                                | ひめゆり平和祈念資料館      |
| ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第43号 (2009年・ひめゆり平和祈念資料館)                                                | ひめゆり平和祈念資料館      |
| ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第44号 (2009年・ひめゆり平和祈念資料館)                                                | ひめゆり平和祈念資料館      |
| ひめゆり平和祈念資料館年報 第20号 (2009年・ひめゆり平和祈念資料館)                                                     | ひめゆり平和祈念資料館      |
| 法政大学沖縄文化研究所所報 第63号 (2008年・法政大学沖縄文化研究所)                                                     | 法政大学沖縄文化研究所      |
| 法政大学沖縄文化研究所所報 第65号 (2009年・法政大学沖縄文化研究所)                                                     | 法政大学沖縄文化研究所      |
| 町並み保存のネットワーク (1987年・宮沢智士編)                                                                 | 飯田泰彦             |
| 宮古郷土史研究会会報No.171 (2009年・宮古郷土史研究会)                                                          | 宮古郷土史研究会         |
| 宮古島市史資料2 宮古の系図家譜 (2009年・宮古島市教育委員会)                                                         | 宮古島市教育委員会        |
| 宮古島市史だより 第2号 (2009年・宮古島市教育委員会)                                                             | 宮古島市教育委員会        |
| ミンサー全書 (2009年・あざみ屋・ミンサー記念事業委員会)                                                            | あざみ屋・ミンサー記念事業委員会 |
| 明治十七年の沖縄県田圃調査とその背景 [法政大学沖縄文化研究所『沖縄文化研究』35号抜刷] (2009年・平良勝保)                                 | 平良勝保             |
| 八重山諸島の狂言資料抄 [沖縄芸術の科学第16号別刷] (2004年・飯田泰彦)                                                   | 飯田泰彦             |
| 八重山探検隊 レポート1 戸戸めぐり (2002年・石垣市立図書館)                                                         | 八重山探検隊           |
| 八重山文化 一特集 黒島の民俗— vol.1 (1966年・早稲田大学八重山文化研究所)                                               | 阿佐伊孫良            |
| 琉球王朝の華—美・技・芸— (第2版) (2009年・海洋博覧会記念公園管理財団)                                                  | 首里城公園管理センター      |
| 琉球・沖縄法社会史年表—平成17から20年度日本学術振興会・科学技術研究補助金・基盤研究 A「沖縄近代法の形成と展開—沖縄の特殊性と普遍性—」— (2009年・田里修・田里雅湖編) | 森 謙二             |
| 琉球楽器復元調査製作業務報告書—基礎資料編— (2009年・海洋博覧会記念公園管理財団)                                               | 海洋博覧会記念公園管理財団    |
| 琉球諸島における〈弥勒〉親に関する一考察—弥勒仮来訪した「海上の道」を探る視点— [沖縄大学地域研究所『地域研究所年報 第18号』抜刷] (2004年・須藤義人)          | 須藤義人             |
| 歴史の町並—伝統的建造物群保存地区—平成21年度版 (2009年・全国伝統的建造物群保存地区協議会)                                         | 竹富町教育委員会         |
| 『歴代宝案』訳注本第7冊 (2009年・沖縄県教育委員会)                                                              | 沖縄県文化振興会史料編集室    |
| 歴代宝案編集参考資料11 『歴代宝案』訳注本第7冊 語注一覧表 (2009年・沖縄県教育委員会)                                           | 沖縄県文化振興会史料編集室    |

## 竹富町史の刊行物

### 1、『竹富町史』別巻2 竹富町関係文献目録 平成2年度 関係機関へ配付

竹富町関係の文献資料の標題、内容、所蔵機関等を各島ごとにまとめた調査研究のための手引き書。日本十進分類法(NDC)に準じて、一般、哲学・宗教、歴史、社会科学(社会科学一般、行財政、教育)、自然科学(自然科学一般、地理・地質、海洋・気象、植物、動物一般、鳥類、医学・衛生)、工学・工業、産業(産業一般、開発・土地問題)、芸術、言語、文学に分類して文献の発行日順に編集、末尾には所蔵機関を明記してある。

B5版 ソフトカバー簡易製本 117ページ。

### 2、『竹富町史』別巻3 写真集 ばいぬしまじま 平成4年度 ¥2,625

明治時代中後期から現代に至るまでの島々の実相を、各島ごとに村落・自然、産業・交通、教育・文化・スポーツ、暮らし・戦争、祭祀・芸能の各項目に分類して写真で表現した資料集。924枚の写真を用い、各島ごとに、一言で島を知る題名を標題に付け、島の“顔”を呈示する。モノクロ写真を主体に編集しているが、巻頭にはカラー写真を用い、竹富町の“今”をアピールしている。写真から古き良き時代の島々を偲ぶことができる。A4版 糸かがり上製本 319ページ。

### 3、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅰ 平成5年度 ¥2,100

1898年(明治31)から1918年(大正7)までの間、沖縄本島で発行された新聞の記事を集成した資料集。収録した新聞は、県内で最初に発行された、「琉球新報」(明治26年創刊)、「沖縄毎日新聞」(明治41年創刊)の二紙。「明治・大正期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、文化等の記事を古い順に配列して編集した。県紙であるため、八重山関係の記事は少ないが、それでも西表炭坑や八重山の地誌等の記事は特値に値する。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 684ページ。

### 4、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅱ 平成6年度 ¥2,100

1917年(大正6)7月から1933年(昭和8)12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「先島新聞」(大正6年7月～同15年8月)、「八重山新報」(大正10年2月～昭和8年12月)、「先島朝日新聞」(昭和3年5月～同8年12月)、「八重山民報」(昭和7年1月～同8年12月)の三紙。「大正・昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は村勢、マラリア問題、村の行財政、選挙等が注目され、往時の竹富村を浮き彫りにしている。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 724ページ

### 5、『竹富町史』第十二巻資料編 戦争体験記録 平成7年度 ¥3,150

アジア太平洋戦争中の町内の世帯別戦災実態調査、全戦没者数、戦争体験記及び沖縄戦、八重山の戦争をまとめた資料集。各島、各集落ごとに詳細な戦災調査を行い、町内における戦争の実態を明らかにしている。特筆すべきは戦時中の集落地図を作製するとともに、さらに集落ごとに各家族単位の戦争被害を具に図表にしてあること。この資料集から戦争マラリア等の惨事を浮かび上げらせ、戦争がいかに悲惨だったかが分かる。A5版 糸か

がり上製本 ケース入り 1,190ページ。

**6、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅲ 平成8年度 ￥2,100**

1934年(昭和9)2月から1945年(同20)3月までの間、八重山と沖縄本島で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「八重山新報」(昭和9年2月)、「先島朝日新聞」(昭和9年1月～同15年8月)、「八重山民報」(昭和9年1月～同11年6月)、「海南時報」(昭和10年8月～同20年3月)、「沖縄日報」(昭和11年11月～同15年10月)、「琉球新報」(昭和13年2月～同15年11月)六紙。「昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料に盛り込まれた記事は多岐にわたるが、当時の世相を反映し、戦時色の濃い記事が目立つ。それでも記者の島を訪ねてのルポルタージュ記事は、往時の島の一面を垣間見せる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 720ページ。

**7、『竹富町制施行50周年記念誌』ばいぬしまじま50 平成10年度 ￥2,625**

1948年(昭和23)の町制施行から1998年(平成10)までの竹富町の50年の足跡を写真、年表等で集成した記念誌。本誌は、島びとの暮らしや学校の様子、祭りなどがモノクロ写真を使用して編集され、その年の人口も掲載し、資料的な価値を持たせるように工夫してある。歴史年表は行政に限らず、婦人会、青年会等の動向も扱い可能な限り詳細に、年別の事項を入れてある。また、姉妹町である北海道の斜里町との親善交流の歩みも盛り込まれている。歴代町長、歴代議会議長、町議会議議員、各課課長の顔写真、職員の集合写真、竹富町振興目票も掲載してある。A4版 糸かがり上製本 247ページ。

**8、『竹富町史』資料集① 鉄田義司日記 平成11年度 ￥1,575**

和歌山県久度山町出身の陸軍少尉(後に中尉・大尉)鉄田義司が残した戦時中に書き残した個人的な陣中日記。彼は1941年(昭和16)、内離島に司令部を置く船浮要塞に赴任したが、その後所属する大隊が石垣島に移転したため、石垣島に移った。日記には赴任の時から要塞での軍事訓練や、石垣島に移駐後に米軍機から初空襲を受けた時の様子、さらに1945年(昭和20)、敗戦後の復員までに至る経過を記す。八重山の戦争を知る同時代資料として価値を有する。A5版 ソフトカバー簡易製本 519ページ。

**9、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅳ 平成12年度 ￥2,100**

1947年(昭和22)1月から1955年(同30)12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は、「海南時報」(昭和22年1月～同30年12月)、「八重山タイムス」(昭和22年1月～同30年12月)、「南西新報」(昭和22年9月～同28年10月)、「自由民報」(昭和23年7月～同29年1月)、「南琉日日新聞」(後に「八重山毎日新聞」と改題、昭和25年3月～同30年12月)、「八重山新報」(昭和30年4月～同10月)の六紙。「昭和戦後期①の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、終戦直後の島々の様子を綴っているが、当時の新聞が一種の「政論新聞」だったこともあり、選挙に関する記事には政治色が濃厚に出ている。それでも紙面から島びとの暮らしを窺い知ることができる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 842ページ。

10、『竹富町史』第十巻資料編 近代2 平成13年度 ￥2,625

南嶋民俗資料館(石垣市宇大川)が所蔵する崎原文書「必要書」、琉球大学附属図書館(西原町千原)が所蔵する宮良殿内文書「必要書類集」を集成した近代文書の資料集編。「必要書」は、崎原當貴が残した文書。當貴は1897年(明治30)に崎山村頭に任じられている。この文書は一種の備忘録で、日記の形式をとる。中でも「人々ヨリ到来物控」は、贈答品のやりとりがあり、往時の村びとの暮らしぶりが臚気ながら分かる。「必要書類集」は宮良殿内の直系である宮良當整が残した文書である。標題に「明治二十五年以降」とあるが、1896年(明治29)から1907年(同40)までの間の行政文書となっている。當整は白保村頭、新城村頭、竹富村頭を務めたが、行政文書は八重山島庁との往復文書、農業統計資料が中心である。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 348ページ。

11、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成V 平成14年度 ￥2,100

1956年(昭和31)1月から1960年(同35)12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「海南時報」(昭和31年1月～同34年4月)、「八重山タイムス」(昭和31年1月同～35年12月)、「八重山毎日新聞」(昭和31年1月～同35年12月)、「八重山新報」(昭和31年1月～同33年3月)の四紙。「昭和戦後期②の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、多岐にわたるが、西表島開発問題をめぐる様々な調査、早稲田大学八重山学術調査団に関する記事等は歴史の一齣として特筆される。なかでも、町長選挙等を巡る記事は、当時の政治の季節を反映し、激しい紙面づくりを展開している。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 843ページ。

12、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成VI 平成15年度 ￥2,100

1961年(昭和36)1月から1964年(同39)7月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「八重山タイムス」(昭和36年1月～同39年7月)、「八重山毎日新聞」(昭和36年1月～同39年7月)、「八重山朝日新聞」(昭和37年1月～同39年7月)の三紙。「昭和戦後期③の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。収録された記事は、各新聞社によって特色があるが、総じて西表開発問題、町有地処分問題と新庁舎建設、八重山市町村合併と町役場移転問題、西表島での米軍事演習、大干ばつ、西表島での中学校統合問題、一年に二度の町長選挙等の記事がクローズアップされる。記事の中には現在に結びつくものもある。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 947ページ。

13、『竹富町史』第十巻資料編 近代1 平成16年度 ￥2,625

竹富島喜宝院蒐集館が所蔵する明治30年代の文書を「近代1」として集成した近代文書の資料編。収録した史料は「村日記-明治37年以降」、「間切島会二関スル書類-自明治31年 至全37年・自明治37年 至」、「報告綴-明治37年」、「人頭税領収証綴-自明治31年 至明治35年」、「契約及金銭物品二関スル諸証書-自明治31年 至全36年」の五点。喜宝院蒐集館にはこのほか、数多くの民俗資料等があるが、これらの一部は写真に収め、口絵として扱った。史料から人頭税施行末期及び廃止直後の島の様子を知ることができる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 546ページ。

14、『竹富町史』第十巻資料編 近代3 平成17年度 ￥2,625

琉球大学附属図書館が所蔵する宮良殿内文書のひとつ。明治30年代初中期の宮良當整日記を「新城村頭の日誌」の副題を付け、「近代3」として集成した近代文書の資料編。宮良當整は1897年（明治30）から1903年（同36）まで新城村頭を勤めた。収録資料は新城村頭時代に書き残した「明治三十三年 日誌 宮良記」「自明治三十四年丑年旧正月 至全十二月 日誌 宮良當整」と表題の付された近代文書。文字中心の資料編だが、ビジュアル感覚を少しでも取り入れることを基本に、新城島にかかわる写真を口絵として配した。史料は當整の私的な日誌だが、明治期の新城島の人々の暮らしなどを窺知できる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 600ページ。

15、『竹富町史』第十巻資料編 近代4 平成18年度 ￥2,625

沖縄県地域史協議会がマイクロフィルムより複製した明治・大正・昭和戦前期の沖縄県に関わる『官報』の記事の中から、八重山関係の記事を検索して収録した資料編。副題に「官報にみる八重山」を付した。『官報』は1883年（明治16）7月2日に創刊され、以後、日刊紙として発行されている。記事は、国会・内閣・裁判所等で決定した事項を国民に知らせる広報紙および民間に関わる広告紙としての性格を有しているとはいえ、行政上の歴史的事実を知るうえで十分な資料的価値がある。記事の中には、人頭税の廃止を裏付ける法律の施行、鉱業権に基づき申請する石炭等の鉱物の試掘・採掘願いの記事もある。「新聞集成」と合わせて利用すると、近代八重山の側面が浮かび上がってくる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 659ページ。

16、『竹富町史』第十巻資料編 近代5 平成20・21年度 ￥2,625

波照間公民館が原本（所在不明）を所蔵していたと思われ、財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室が複製本を所蔵する「島庁通達綴 自明治三十五年一月 至三十七年十二月 波照間村事務所」、「波照間島番所日記」（明治二八年～二九年）、それに波照間小学校が保管する「波照間小学校沿革誌（第壹部）」の三資料を、「波照間島近代資料集」の副題を付け「近代5」として集成した近代文書の資料編。「島庁通達綴」が送付された時代は人頭税が幕を閉じ、日露戦争が勃発して日本が帝国主義を歩み始める時期にあたる。資料には日露戦争にかかわる通達等もある。また、標題がないため仮に付したであろう「波照間島番所日記」は1895年（明治28）～1896年（同29）までの村番所の動向を日記スタイルで書き止めたもので、島の人物が数多く登場し、祭祀も載っており貴重なものである。「波照間小学校沿革誌」は、1894年（明治27）～1948年（昭和23）までの学校の沿革を「第壹部」としてまとめられている。学校の生徒数、人事異動、記念日などが記され、太平洋戦争なると強制疎開のことなどが記されている。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 434ページ。

※竹富町史の刊行物は、石垣市・那覇市・宜野湾市の主な委託販売契約店での販売を行っております。詳細については、竹富町教育委員会総務町史編集課（電話0980-88-7220）までお問い合わせください。

## 編集後記

◆『竹富町史』第十巻資料編「近代5―波照間島近代資料集」を発刊することができました。ここに波照間島の近代資料3題（「島庁通達綴」「波照間島番所日誌」「波照間小学校沿革誌」）が1冊にまとまりました。本書は「波照間島編」のみならず、同時代資料として、島々の近代史にも役立っていたべきだと思います。

◆とはいえ、「島じま編」の編集が難航しています。発刊の皮切りとなる『竹富島編』では、原稿は集まったものの、卓立てや他の島とのバランス、内容の重複を考えると、再構成の必要があり、只今調整中です。

◆さて、『竹富町史だより』第31号は、寄贈資料（「西表島の自然」）や、「島じま編」に取り組みながら、集まった原稿（「竹富島の人物 金城亀千代」「第二の故郷 下地島」）を中心に構成しました。

◆今後も新しい資料の紹介や、「島じま編」編集に必要な情報交換の場となるような紙面づくりに心がけたいものです。

（飯田泰彦）



平成22年3月31日発行

竹富町史だより

第31号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11番地-1

☎ 0980-82-6191